

立ち歩きによる学び合いの発展に関する研究

石崎 隆^A

ISHIZAKI Takashi^A

上越教育大学大学院

〔キーワード〕 立ち歩き

西川 純^B

NISHIKAWA Jun^B

上越教育大学

つづやき 学び合い 人間関係

1 研究の背景と目的

講義式授業において、効果的な学び方として教室で騒いだり、友だちに話しかけたりしないで、熱心に授業に耳を傾けるような態度を身につけることが必要とされてきた。しかし、講義式授業における教師からの一方的な知識の伝達では、詰め込み教育となる。その弊害として、応用ができない、積極性がない、すぐに忘れる、結局は理解していないなどの問題が生じている。

改善として、話し合いを中心とする授業形態がとられるようになった。話し合いの準備として活動するグループを「ほぼ同質（同能力）の児童で構成しておく、実験の方法・手段・分担など、みんなで話し合いながら進める。」との理由から教師が決めることがある。また、話し合いの司会者を設定するなど子どもが話し合うまでに教師の指導により秩序ある話し合いができるようにしている。その結果、授業で積極的に発言することはできるが、話し合いによって、一人一人の子どもの中での学習体験が交流されていないことが指摘されている。そこで、子どもの平常の姿を生かしながら学習効果をあげる方法に注目が集まっている。

桐生ら（2002）では、教師の指導を少なくし、グループの話し合う必要性を明確にし、授業中の情報交換や立ち歩きを全面的に取り入れ調査を行った。その結果、「子どもたちに課題を与え、自由な活動を保障した時、課題と無関係な会話や活動が生じる。課題と無関係な会話を含みながら、質の高い学びへと変化する。」と報告している。これは、学習者のもつ力を信じることによって学習効果が上がることを示唆している。

また、桐生らと同様な方法で調査を行った西川（2003）では、私語の中にも質の高い学びが行われていることを報告している。さらに、子どもが他のグループに立ち歩き、情報交換をすることで学びのネットワークを広げ、よりよく学び合うことを報告している。

しかし、授業中の子どもの移動の経路を線で示すことからネットワークの広がりがあったと述べているが、

子ども一人一人について誰とグループを形成したかについては述べられていない。子ども一人一人に着目し、学び合いのグループ形成について述べられたものに西川・萩原の研究がある。

西川・萩原(2000)において、「学び合う集団が仲良しグループ、席の近いもの同士という単純な成因によって形成されていないことを示した。」と報告している。つまり、新しい情報を求め、子どもたちが関わりをもうとするのは、近くの子どものみではなく、離れた子どもへも立ち歩き、情報を獲得することで学び合うことが有効になると指摘している。

しかし、学び合いにおける立ち歩きの有効性を指摘しつつも、立ち歩きの分類、学習課題の解決に繋がる立ち歩きとグループの目標との関係については調べられていない。

そこで本研究では、学習目標を明示し、教師が直接指導することを控える。さらに、子どもが自由に立ち歩き、情報を交換する活動をすべての授業で認め、調査を行い子ども一人一人の会話と行動を詳細に分析する。その結果から、クラスの大多数のグループが目標を共有したならば、立ち歩きは学びの有効な手段となりうることを明らかにする。

2 研究の方法と結果

本研究では、小学校6年理科「動物のからだのはたらき」「植物のからだのはたらき」において立ち歩き、学び合うことを積極的に認めた。また、教師が教えずに子ども相互の学び合い、交流することを奨励した実践授業を行った。

分析1は、「立ち歩きと立ち歩きを導く理由」とし、分析により認められた立ち歩き（265例）について、立ち歩きの目的別に分類を行った。その結果、すべての立ち歩きを「物品」、「情報」、「プリント掲示（確認・質問）」、「プリント掲示（提出のみ）」、「ふざけ」に分類することができた。

そして、分析により認められた立ち歩きのうち、立

立ち歩きの 88%は学習課題の解決に繋がっていることが明らかになった。また、学習課題の解決に繋がらない立ち歩きは12%で、その中で、他の学習者の学習障害になる「ふざけ」は6%に過ぎないことが明らかになった。

分析2は、「立ち歩きとグループ内会話の関係」とし、立ち歩き前後のメンバーとの情報の確認・共有の有無と立ち歩き後にグループの会話が学習課題の解決に繋がるかを観点として、4つのカテゴリーに分けた。

事例1として、メンバーとの情報の確認・共有があり、かつ立ち歩き後にグループの学習課題の解決に繋がった事例。

事例2として、メンバーとの情報の確認・共有があり、かつ立ち歩き後にグループの学習課題の解決に繋がらない事例。

事例3として、メンバーとの情報の確認・共有がなく、かつ立ち歩き後にグループの学習課題の解決に繋がった事例。

事例4として、メンバーとの情報の確認・共有がなく、かつ立ち歩き後にグループの学習課題の解決に繋がらない事例。

この結果、学習課題の解決に繋がる立ち歩きの場合、立ち歩きの前後のいずれか(両方)で、立ち歩きの情報の確認・共有が行われていることが明らかになった。

分析3は、「立ち歩き先での発言と立ち歩き先

のグループ内会話の阻害」とし、立ち歩き先で発言がある立ち歩きについて詳細に分析した。その結果、立ち歩きを受けるグループが目標を共有する場合、ふざけを無視するか、ふざけてもグループの会話に戻る、立ち歩いてきてふざけた子どもが、立ち歩きを受けるグループの目標に取り込まれることが明らかになった。

3 全体考察

本研究では、教師による話し合い環境の整備や学習活動の直接的な指示がなくとも、子どもたちは立ち歩きを活用して適切な情報を選択し学び合いを発展させていくことを明らかにした。これは、子どもには自ら学び合いをし、発展させていく能力があることを示している。

したがって、「教師が語らねばならないこと」と「教師が語らずに子どもに任せること」の区別を検討し、学習を進めることが大切であると考え。

4 引用・参考文献

- 辰野千寿(1979) 効果的な学び方・学ばせ方 改訂版 - 入門・学習心理学-, 図書文化社, pp.214
- 西林克彦(1994) 間違いだらけの学習論 なぜ勉強が身につかない, 新曜社, pp.157
- 山岡康邦(1981) 話し合い 小学校指導技術基礎講座 (3), ぎょうせい, pp.17
- 家本芳郎(1992) 楽しい「授業づくり」入門, 高文研, pp.106
- 蘭 千壽(1983) 児童の学業成績および学習態度に及ぼす Jigsaw 学習方式の効果, 教育心理学研究 第31巻第2号, pp.102-112
- 遠西招寿・伊藤聡子・円谷秀雄・高橋忠雄(1983) 理科実験学習におけるグループ構成とその効果(1) ソシオメトリックなグループ構成について, pp.9-19
- 家本芳郎(1990) 私語・おしゃべりの教育学 私語は指導の出発点, 学事出版, pp.92-94
- 桐生 徹・西川 純(2002) 異学年学習形態を用いた教科学習に関する研究, 臨床教科教育学会研究紀要 Vol1 No.1,
- 西川 純(2003) 静かにを言わない授業, 東洋館出版, pp.42-60
- 西川 純・萩原恵美(2000) 継続観察を基にした理科学習集団形成に関する事例的研究, 日本理科教育学会研究紀要 Vol.24 No.2, pp.122-130
- 西川 純(2000) 学び合う教室 教師としての学習者, プロデューサとしての教師の学習臨床学的分析, 東洋館出版社, pp.46
- 水落芳明・西川 純:「他の学習者の学習状況を見えやすくすることによるコンピューターリテラシーの間接的伝播と効果 - 相互作用を軸としたい異学年学習の実践から - 」, 日本教育工学雑誌 27(Supple), pp.239-243, 2003